

研究委員会企画シンポジウム 2

道徳の時間を豊かにする

ー ソーシャルスキル教育との関連から ー

企画者 相川 充 (東京学芸大学)
 渡辺 弥生 (法政大学)
 瀧野 揚三 (大阪教育大学)
 司会者 相川 充 (東京学芸大学)
 話題提供者 石川 芳子 (東京都練馬区立仲町小学校)
 白木 みどり (石川県白山市立北星中学校)
 渡辺 弥生 (法政大学)
 林 泰成 (上越教育大学)
 指定討論者 瀧野 揚三 (大阪教育大学)

企画の趣旨

相川 充

子どもたちにソーシャルスキルを授業枠の中で教えるソーシャルスキル教育が、全国の小中学校で実施されるようになってきた。しかし、道徳の時間にソーシャルスキル教育を実施することに関しては、道徳教育の専門家の一部からは批判の声があがっている。他方、道徳の授業については、その進め方が形骸化しているという声や、他の授業のために安易に潰されたりしているという声もある。

そこで本シンポジウムでは、道徳教育とソーシャルスキル教育は統合や融合できないのか、できるとしたらどのような点に配慮すればよいのか検討し、道徳の時間を豊かにするにはどうしたらよいのか探った。

ソーシャルスキル教育による道徳の実践

石川 芳子

「心の教育」が叫ばれて久しいが、青少年の犯罪は後を絶たず、そのつど道徳教育の充実が叫ばれてきた。

小学校学習指導要領では、道徳教育の基本的なあり方として、人間としてよりよく生きるためには、様々な体験や学習を通して道徳性の確立を図っていくことが示されている。従来の道徳の授業は、読み物資料が中心で、資料の中の主人公の気持ちを話し合い、その中で友だちの考えを知ったり、自分の中の道徳的価値に気付いたりすることがねらいであった。子どもたちは、「命の大切さ」や「思いやりの心をもって接することの大切さ」などは、知識としてわかっている。にもかかわらず、相手を傷つけてしまうことが多い。それは、実体験あるいは

擬似体験を伴わない知識を学習しているからではないか。

希薄化した人間関係の中で育ってきている子どもたちを、“知識として知っている”から、“体験として知る”ことへ変換させる必要がある。そうでなければ、本当に理解したことにはならず、道徳的实践つまり行動の変容を生起させることは難しい。子どもたちの心に響き、心を揺さぶるためには、様々な豊かな体験の場を用意し、道徳的価値の内面化を図っていく必要がある。

小学校学習指導要領解説(平成11年度)第4章4節では学習指導の多様な展開や工夫として、役割演技、コミュニケーションを深める活動、感性や情操を育む体験、動作化や劇化の工夫などを取り入れ、道徳的価値の自覚を一層深めていくことが大切であると述べられている。

そこで、多様な展開や工夫の一つとして、ソーシャルスキル教育を取り入れた道徳の授業を考えた。生活経験が乏しい子どもたちにとって、モデリングを示し、リハーサルで繰り返し練習させ、フィードバックを与えるという流れで行うソーシャルスキル教育は、擬似体験を通して自己の内面を揺さぶり価値の自覚を深め、道徳的实践力につながると考えられる。

本実践では、「思いやり」について扱い、実践の場に生かせるよう、日常生活で起こる場面を題材にした資料を作成した。展開では、まず適切なスキルやロールプレイのやり方を示し、リハーサルではロールプレイによる擬似体験を行わせた。これにより、相手の気持ちを大事にした適切なスキルを学ばせた。ロールプレイは、自己を振り返り、自分の行動を修正して、これからの行動の目標をもつよい機会となる。そこでの体験は、自己や他者の気持ちに気付いたり、共感したり、葛藤したりして、道徳的価値への自覚を深めていき、知識として知るから、体験として知ることへの変換を促す。

従来の授業では価値の押し付けはしないで余韻をもって終わるが、ソーシャルスキル教育のまとめの振り返りでは、自己を振り返らせて行動修正を促し、今後の行動目標をもたせて日常生活への定着化を目指す。これは、道徳的实践の基盤ともなる道徳的实践力を育てることになり、即効性のある道徳を目指すことができる。

ソーシャルスキル教育による道徳授業の実践は、あくまでも多様な展開や工夫の一つである。子どもたちの内